

2月第3週の礼拝説教

■日 時：2023年2月19日（日）10：30－11：30 降誕節第9主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「讃美の祈りを唱え」

■聖 書：ルカによる福音書9章10～7節（新約p121～122）

■讃美歌：56「主よ、命のパンをさき、」494「ガリラヤの風 かおるあたり、」

先週は、まさに「三寒四温」という冬の終わりを表す言葉が当てはまるような寒暖差の激しい天候でした。けれども、教会の入口の坂の途中に枝が張り出している桜は、少しずつ咲き出して春の到来を告げています。先週の2月12日（日）に教会創立72周年の記念礼拝をささげた立川教会も春の訪れとともに、主なる神様の導きとお支えを感謝しながら、新しく歩み出したいと思います。

さて、先ほど司式者に読んでいただいた本日の聖書箇所ルカによる福音書9章10節から17節には、「**五千人に食べ物を与える**」という見出しがついています。よく申しあげることですが、その見出しの左横の括弧をご覧ください。そこには、マタイによる福音書、マルコによる福音書、ヨハネによる福音書に同じ話があることが記されています。つまり、この「**五千人に食べ物を与える**」という出来事は、4つの福音書すべてが語っているということになります。そして、福音書の中では主イエスのなさった様々な奇跡が語られているわけですが、4つの福音書すべてに記されているのはこの「**五千人に食べ物を与える**」ということだけなのです。それだけ、多くの人たちによってこの出来事は覚えられ広く伝えられていたということになります。話の内容は非常に具体的で、難しい言葉もありません。しかし、「あなたはこの話を信じるか」と問われたなら、正直なところ、「はい、信じます」ととっさには答えられないというのが私たちの本音ではないかと思います。

私は新約聖書を読み始めたころ、「……の手紙」という題がついているものは何とか読み進めることができました。自分自身に当てはめて考えることができる箇所があったからです。また、福音書もほとんどの部分は何とか読むことができました。奇跡を記している箇所であっても、病気の癒しや嵐を静めたりする場面は自分自身の理屈に当てはめて納得するようにしました。死者をよみがえらせるというラザロの復活の出来事でさえ、昔のことだからきちんと死の判定ができていなかったのではないかと、思うようにしました。また、主イエスの復活については、その頃はキリスト教とユダヤ人と関わりについても何も知りませんでしたから、マタイによる福音書28章11節から15節のところを読んだ時

に、きちんと聖書は私たちが理解できるように説明しているのではないか、と感心していたほどです。しかし、「**五千人に食べ物を与える**」という箇所だけは、聖書に書かれているのだからその通りのことが起こったのだろうが、自分自身のこととしては受け入れられないという思いが長い間残っていたのです。教会学校の教師をしていた時には、ヨハネによる福音書に記されている「**大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年**」を取り上げて話しました。小さな少年が自分のお弁当として持っていた食べ物を最初にイエス様に出したので、他の人たちも持っていたパンや魚を出した、だから、たくさんの人たちが食事をすることができたし、残ってしまうほどだったと、自分自身を納得させるようにして話しました。ですから、日本基督教団の聖書日課で選ばれているとはいえ、本日の主日礼拝でこの箇所を取り上げることは最後まで迷いました。しかし、1本のかすかな線が見えてきましたので、お話ししたいと思います。

この出来事が実際にどのように起こったかということは、それぞれの福音書が記している以上のことはわかりません。しかし、誰かが作り出した物語ではありません。16節に「**イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた**」。とありますから、「わずかな食物を主イエスが祈られて人々とともに分け合い、大勢の人が満たされた」というような弟子たちの体験があったと考えられます。そして、彼らがその体験を通して感じたのは、「この方のもとにこそ、本当の豊かさがあり、本物のいのちがある」ということだったのでしょうか。そして、その場の主イエスの言動は、ルカによる福音書22章19節に記されている最後の晩餐の時の様子と非常に似ているのです。「**イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。『これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。』**」と記されています。本日の箇所9章16節の「**賛美の祈りを唱え**」は、食事を前にして神の祝福を求めて祈るという意味もあります。その内容は先ほど取り上げました22章19節の「**感謝の祈りを唱え**」と同じだと考えられます。また、9章16節の「**弟子たちに渡して**」と22章19節の「**使徒たちに与えて**」というところには、元の言葉では同じ動詞が使われています。そして、ルカによる福音書24章の有名なエマオ途上の二人の弟子と主イエスの出会いの出来事の中では、30節で「**一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。**」と記されています。二人の弟子が一緒に歩いていた旅人を復活した主イエスだと気づくのも、主イエスが賛美の祈りを唱え、パンを裂いたときでした。

そういうわけで、ルカによる福音書は 「パンを取り、賛美（あるいは感謝）の祈りを唱

え」はほとんど1つの動作です。パンを取り、天を仰ぐのは、賛美の祈りを唱えるためなのです。「このパンは神から与えられたものだ」ということを深く受け止める行為だと言うことがわかります。「裂いて、弟子たちに渡す（あるいは与える）」もそれに続いて行われている一連の動作と考えられます。そのように、聖書の箇所の流れを追って読んでまいりますと、本日の箇所の主イエスが弟子たちを召し出し伝道を始められたころの「五千人に食べ物を与える」という出来事と、十字架の出来事を前にしての弟子たちとの「最後の晚餐」と、主イエスが復活なさって二人の弟子たちと共にした食事とが1本の線でつながっていることが見えてきます。本日の箇所の9章17節では「**すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。**」と記されています。「パンの屑」と訳されている元の言葉は「裂かれたもの」という意味があります。12という数が弟子たちの数と同じであることに注目すれば、弟子たちが1つずつカゴを持って、主イエスの裂かれたものをその場にいない人々にも届けに行く使命を与えられているということになるのでしょう。また、12という数字は完全数でもあります。本来なら、5つのパンと2匹の魚では、少年の昼食程度の少ないものでした。しかし、主イエスの賛美の祈りによって祝福されたなら、それは尽きることのない命の食物となって多くの人々を養うことになりました。今生きる私たちもまた、その残りの「裂かれたもの」言い換えれば命の言葉によって日々養われています。そして、その私たちもまた、「裂かれたもの」の入った籠を主イエスから渡されたものとして、命の言葉を伝える者として歩んでいきたいと思えます。